

読書興味の発達段階モデルについての再検討

専修大学 野口 武悟

Reexamination of the developmental model of reading interests

Senshu University NOGUCHI, Takenori

要約

読書興味の発達に関して、わが国では近年、新たな研究が少なく、読書興味の発達段階については、現在でも阪本一郎が約60年前に提示したモデルが広く用いられている状況にある。子どもを取り巻くメディアや読書環境が激しく変化している現在にあつて、阪本の提示したモデルは、はたして有効なものといえるのであろうか。そこで、本研究は、阪本の示した読書興味の発達段階モデルを再検討し、現状に即した発達段階モデルを提示することを目的とした。研究の結果、a.絵本期（～8歳）、b.童話期（6歳～10歳）、c.児童文学期（8歳～13歳）、d.大衆文学期（11歳～）、e.ライトノベル期（13歳～）というモデルが提示できた。このモデルは、阪本のモデルと一部は共通するものの、昔話期、寓話期、物語期、伝記期、思索期といった段階は見られない。阪本のモデルと比べると、読書興味の発達段階は著しく平板化しているといえる。

【キー・ワード】 読書指導, 読書興味, 発達段階モデル

Abstract

There are only a few new researches in Japan on reading interests and, therefore, the developmental model of reading interests presented by Ichiro Sakamoto almost 60 years ago is still being used. The model that had been presented by Sakamoto cannot be considered effective when the media and the reading environment of children have changed significantly since then. Therefore, this research aims to review Sakamoto's model and present a development model for reading interests that reflects the present situation. The results of this research can be presented as a model comprising of: a. the picture-book stage (up to 8 years); b. the fairy-tale (children's story) stage (6 to 10 years); c. the children's literature stage (8 to 13 years); d. the popular literature stage (from 11 years); e. the light novel stage (from 13 years). This model is considerably flatter than the Sakamoto's model.

【Key words】 reading guidance, reading interests, developmental model

問題と目的

近年、子どもの読書活動を充実しようという社会的機運が高まっており、「子どもの読書活動の推進に関する法律」（2001年制定）や、「文字・活字文化振興法」（2005年制定）が相次いで制定されている。また、2003年4月からは12学級以上の規模の小、中、高等学校等に司書教諭の配置が義務づけられた。こうした状況を受け、学校現場では、校内で読書活動の推進に取り組むところが増えている（朝の10分間読書など）。その中核となるのが司書教諭である。司書教諭の仕事は多岐にわたるが、なかでも子どもの読書指導や読書相談は重要であり、適切な指導や相談を行うためには、読書能力（reading ability）や読書興味（reading interests）の発達段階を理解し、子ども一人ひとりの能力や興味の発達の状態を把握していることが不可欠となる。

ところが、読書興味の発達に関しては、わが国では近年、新たな研究が少ない状況にある。読書科学の近年の研究動向をレビューした塚田泰彦によると、「1960年代に、読書興味やレディネスの研究、読書と性格や態度に関する研究にまとまった成果があることも注目される」と述べている（塚田、2010）。また、1982年に過去25年間の読書科学研究の動向を整理した阪本敬彦も、読書興味の研究は、初期（1950年代・60年代）にいくつかかたまっており、「これら一連の読書興味研究のあと、長い間論文が途切れ」たとしている（阪本、1982）。

なかでも、読書興味の発達段階については、現在でも、阪本一郎が1949年から1950年にかけて提示したモデル（阪本、1949；1950）が大学における司書教諭養成科目の主要なテキスト（例えば、朝比奈・米谷、2009など）に掲載され、教えられている。阪本が提示したモデルとは、a.子守り話期（2歳～4歳）、b.昔話期（4歳～6歳）、c.寓話期（6歳～8歳）、d.童話期（8歳～10歳）、e.物語期（10歳～12歳）、f.伝記期（12歳～14歳）、g.文学期（14歳以後）、h.思索期（17歳以後）というものである。阪本は1976年の自編著のなかで、この発達段階モデルの元になった「資料は戦前に集めた子どもの読書傾向であるが、この傾向は戦後の今も同じであることから、発達課題は今も昔も変わらない」と述べている（阪本、1976）。この記述の根拠になっているのは、阪本らが行った追試であるが、それも1959年の2つの研究が最後であり（阪本・西尾、1959；阪本・野口、1959）、それ以降追試は行われていない。1959年の両研究では、「従来研究された、読書興味の発達の段階を修正すべき、発達心理学的、社会学的変化はないのである」と結論付けている。なお、阪本は、1979年に自らの発達段階モデルに一部修正を加えている（阪本、1979）が、新たな調査を行ったわけではなく、ベースは同じである。

1990年代に入って、樋口洋子が、阪本の発達段階モデルは「現状に即しているとは言いがたい」として、児童図書館1館の利用者（3歳～15歳の63人）を対象に読書興味の発達段階に関する新たなモデルを提示しようと試みた（樋口、1991）。そして、a.絵本期（4～7歳）、b.幼年童話期（6～9歳）、c.伝承文学期（8～11歳）、d.創作文学期（8～12歳）、e.伝記期（9～13歳）、f.文学期（13歳～）というモデルを示している。この樋口モデルは、阪本モデルに比べると、各段階に相当の重なり合いが見られるものとなっている。しかしながら、対象とした子どもの数が少なく、かつ、対象には高校生が含まれていないなどの課題が残されたままである。

はたして、60年も前に示された阪本の読書興味の発達段階モデルは、子どもを取り巻くメディアや読書環境の変化が激しい現在にあっても、なお有効なものといえるのであろうか。そして、もし、有効でないとするならば、モデルを現在の子どもの読書興味の实態に即して修正する必要がある。

そこで、本研究では、阪本の示した読書興味の発達段階モデルを再検討し、現状に即した発達段階モデルを提示することを目的とする。

方 法

前述の研究目的を達成するため、阪本・西尾（1959）及び阪本・野口（1959）の用いた調査方法・内容及び分析方法を援用して、追試を行う。以上の調査で得られたデータを分析し、考察（結果のまとめと阪本モデルの再検討）を行う。

1.調査対象

阪本・西尾及び阪本・野口が調査対象とした学校を中心に調査協力の依頼を行い、承諾していただいた関東地方、関西地方にある国公立の小学校、中学校、中等教育学校、高等学校あわせて18校を調査対象とした。内訳は、小学校6校、中学校8校、高等学校6校である（なお、本研究では、中等教育学校については、前期課程を中学校、後期課程を高等学校として分割して取り扱う）。

回答のあった子ども（以下、児童生徒とする）の数は、小学生3539人（男子1784人、女子1755人）、中学生3111人（男子1533人、女子1563人、不明15人）、高校生1420人（男子488人、女子920人、不明12人）であった。学年別内訳は、小学1年生259人、小学2年生636人、小学3年生659人、小学4年生659人、小学5年生666人、小学6年生660人、中学1年生1042人、中学2年生1024人、中学3年生1045人、高校1年生480人、高校2年生509人、高校3年生431人であった。なお、前述の阪本・西尾及び阪本・野口の研究では、小学生4027人、中学生2340人、高校生1925人のデータを収集、分析しており、今回の調査ではこれら先行研究とほぼ同規模のデータを収集することができた。

2.調査時期

調査時期は、2011年6月1日～6月25日とした。

3.調査方法

調査方法は、次の通りである。各学校の司書教諭もしくは学校司書宛てに児童生徒数分の質問紙を送付し、学級ごとに児童生徒が直接回答する方式で実施した。回答後の質問紙は、再び、司書教諭もしくは学校司書がとりまとめ、調査者（筆者）に返送してもらった。

4.調査内容

調査内容（質問紙の主な構成）は、次の通りである。

- (1) 現在興味のあるメディアの種類 (13 種類のメディアのなかから 5 種類まで選択。13 種類のメディアとは、a.テレビ、b.ラジオ、c.本、d.マンガ、e.雑誌、f.新聞、g.映画、h.ビデオ・DVD、i.CD、j.インターネット、k.ケータイ (携帯電話)、l.ゲーム (Wii、DS、プレイステーションなど)、m.電子書籍である。)
- (2) 最近読んだ本のなかで興味をもった本の著者、タイトル (5 冊まで記入)
- (3) 一日あたりの読書時間 (分単位で記入)
- (4) 一ヶ月あたりの読書冊数 (2011 年 5 月における冊数を記入)

なお、本調査においては、マンガと雑誌は本とは別のメディアとして扱い、本には含まない旨を質問紙に明示した。また、教科書及び学習参考書も同様に扱った。

結 果

1.児童生徒が興味を持っているメディア

児童生徒が現在興味を持っているメディアについて質問した (13 種類のメディアのなかから 5 種類まで選択して回答。%)は有効回答児童生徒数に対して算出。有効回答児童生徒数は小学生 3516 人、中学生 2979 人、高校生 1281 人)。

小学生、中学生、高校生に大別したときの興味の傾向は、図 1 のようになった。興味の高いメディアを 5 つまで挙げると、小学生では、テレビ (71.3%)、本 (60.4%)、ゲーム (58.7%)、映画 (46.8%)、マンガ (45.6%) であった。中学生では、テレビ (65.9%)、インターネット (52.4%)、マンガ (49.2%)、本 (42.7%)、ケータイ (41.5%) であった。高校生では、テレビ (57.4%)、ケータイ (52.0%)、マンガ (46.9%)、映画 (41.6%)、インターネット (41.4%) であった。最も興味の高いメディアは、小学生から高校生まで一貫してテレビであった。中学生になると、インターネットやケータイが興味の上位に登場する。中学生では、ケータイよりもインターネットへの興味が高いが、高校生になると、逆に、ケータイへの興味がインターネットよりも高くなっている。また、高校生になると、興味の上位からは本が見られなくなる。一方で、興味の低いメディアとしては、ラジオ (小学生 4.6%、中学生 6.3%、高校生 5.2%)、新聞 (小学生 13.6%、中学生 8.1%、高校生 4.0%)、電子書籍 (小学生 10.1%、中学生 11.7%、高校生 5.5%) の 3 つが小学生から高校生まで共通して見られた。なお、もう少し詳しく、学年別に興味の傾向を示すと、図 2 のようになった。

また、男女別に興味の傾向を整理すると、次のようになった。男女間で興味に 10%以上の差が見られたもののうち、男子の興味が高かったのは、小学生では、ゲーム (男子 75.4%、女子 41.7%)、マンガ (男子 51.3%、女子 39.8%)、中学生では、ゲーム (男子 60.5%、女子 16.3%)、マンガ (男子 54.7%、女子 43.9%)、高校生では、ゲーム (男子 51.4%、女子 16.1%)、マンガ (男子 58.9%、女子 41.3%)、インターネット (男子 51.2%、女子 36.8%) であった。一方で、女子の興味が高かったのは、小学生では、本 (男子 49.3%、女子 72.0%)、CD (男子 11.2%、女子 26.8%)、雑誌 (男子 8.1%、女子 20.4%)、中学生では、雑誌 (男子 9.8%、女子 36.2%)、CD (男子 28.6%、女子 51.1%)、ケータイ (男子 32.9%、女子 49.9%)、本 (男子 37.3%、女子 48.2%)、高校生では、雑誌 (男子

24.2%, 女子 47.9%), ケータイ (男子 43.1%, 女子 56.5%), CD (男子 33.3%, 女子 45.5%) であった。なお、本については、高校生になると、男子 28.0%, 女子 28.7%となり、男女とも興味が低下し、かつ差がほとんど見られなくなる。

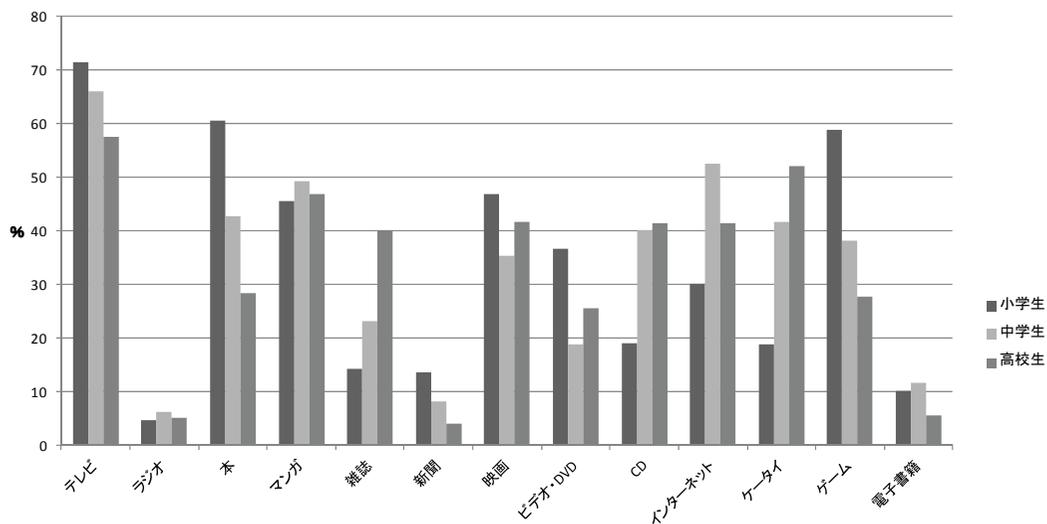


図1 児童生徒が興味を持っているメディア

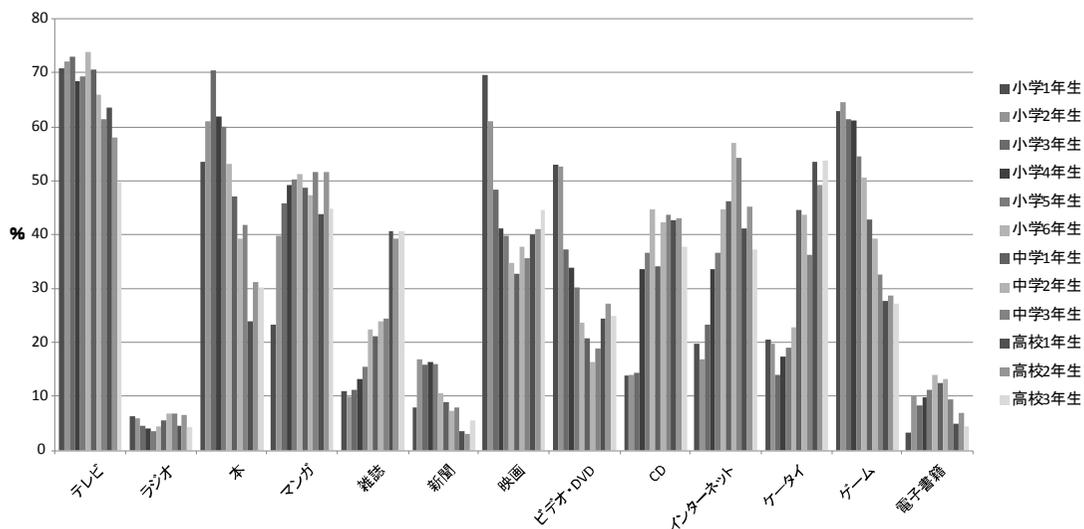


図2 児童生徒が興味を持っているメディアの学年別傾向

2. 児童生徒が興味を持っている本

最近読んだ本のなかで興味をもっている本の著者、タイトルを質問した(5冊まで記入して回答)。それをもとに、ジャンル別に分類、整理した(%は有効回答冊数に対して算出。回答のあった本の著者、タイトルからマンガや雑誌などを除いた有効回答冊数は小学生10,819冊、中学生8,587冊、高校生1,519冊)。ジャンルとしては、阪本・西尾(1959)及び阪本・野口(1959)が用いたものを現状に即して一部修正して、37ジャンルを設定した(表1)。

小学生、中学生、高校生に大別したときの児童生徒が興味をもっている本のジャンル別一覧は、表2の通りである。この表では、比較のため、阪本・西尾及び阪本・野口による1958年の調査のデータもあわせて掲載した。

小学生では、児童文学の系統に興味を持っている割合が高く、その内訳は、児童文学(表1の14~26以外のジャンル)17.2%、童話14.9%、怪談(怪奇物語)5.0%、探偵物語3.8%、ファンタジー・SF3.2%などとなっている。児童文学(表1の14~26以外のジャンル)は、フォア文庫(岩崎書店など4社共同企画)、青い鳥文庫(講談社)、つばさ文庫(角川書店)など、従来の児童文学の各ジャンルとライトノベル(後述)をあわせたような、いわば「児童向けライトノベル」といえるものがその中心となっている。フォア文庫は、1979年に創刊された児童文学の文庫シリーズであったが、2000年代から刊行作品にライトノベル化の傾向が見られるようになった。また、青い鳥文庫は、1980年に創刊された児童文学の文庫シリーズであるが、1990年代末から同様にライトノベル化の傾向が見られるようになっている。児童文学以外では、絵本が18.3%、大衆文学が13.1%、自然科学5.7%などとなっている。絵本は、低学年・中学年の児童、大衆文学は高学年の児童で関心を持っている者が多い。自然科学では、昆虫の図鑑などに興味を示す児童が低学年・中学年の男子を中心に多い。1958年の調査と比較すると、児童文学の系統に興味を持っている割合が高いことは同様である。しかし、1958年の調査では児童文学の各ジャンルに興味分散している傾向にあったが、今回の調査では児童文学(表1の14~26以外のジャンル)、童話、怪談(怪奇物語)に興味集中している傾向にあることが分かる。児童文学以外では、1958年の調査では14.0%を示した伝記が今回の調査ではわずか1.6%にとどまっている。一方で、1958年の調査では0.1%に過ぎなかった大衆文学が今回の調査では13.1%となっている。

表1 本のジャンル一覧表

大区分	コード	ジャンル (例示)	(参考: 阪本による分類)
	1	宗教	2. 宗教
	2	人生訓	3. 人生観
	3	伝記	1. 美談, 4. 伝記, 5. 逸話
	4	歴史物語・時代物語 (ex. 三国志)	6. 歴史物語 8. 時代物語
	5	歴史	7. 歴史
	6	地理・旅行 (ex. ガイドブック)	9. 地理 旅行
	7	社会科学	10. 社会
	8	科学物語 (科学読み物)	12. 科学物語
	9	自然科学	11. 科学
	10	産業・工業	—
	11	スポーツ	13. スポーツ物語
	12	芸術 (音楽・美術・芸能 (演劇等))	14. 図画・工作, 15. 芸能
	13	言語 (ことば)	16. 作文, 17. 国語
児童文学	14	昔話	18. 昔話
	15	寓話 (ex. イソップ物語)	19. 寓話
	16	伝説	20. 伝説
	17	神話	21. 神話
	18	童話	22. 生活童話
	19	動物物語 (ex. 小鹿物語, フランダースの犬)	23. 動物物語
	20	ファンタジー・SF (ex. ゲド戦記, モモ, 不思議の国のアリス)	24. 架空物語
	21	英雄物語	25. 英雄物語
	22	冒険 (探検) 物語 (ex. 宝島, ロビンソンクルーソー, エルマーの冒険)	26. 冒険探検物語
	23	探偵物語 (ex. エーミールと探偵たち)	27. 探偵物語
	24	親子 (家族) 物語 (ex. 若草物語)	28. 親子物語
	25	友情物語 (ex. 飛ぶ教室)	29. 友情物語
	26	怪談 (怪奇物語)	—
	27	児童文学 (上記 14~26 以外)	32. 少年文学
ヤングアダルト・一般	28	エッセイ (随筆)	31. 随筆
	29	純文学	33. 純文学
	30	大衆文学 (ミステリーを含む)	34. 大衆文学
	31	ライトノベル (軽文学) (ex. 電撃文庫)	—
	32	携帯小説 (ex. 恋空, 赤い糸)	—
	33	詩歌	36. 詩歌
	34	戯曲・脚本 (ex. シェイクスピア)	37. 戯曲・脚本
	35	ルポタージュ (記録文学) (NDC916 に相当)	38. 記録
絵本	36	絵本	—
	37	その他	30. 出世物語 35. ユーモア (その他)

表2 児童生徒が興味を持っている本のジャンル別一覧

(単位は%)

		小学生		中学生		高校生		
		2011年	1958年	2011年	1958年	2011年	1958年	
1	哲学・宗教	0	0.2	0	0.4	0.3	0.1	
2	人生訓	0.2	0.1	0.7	1.3	1	0.9	
3	伝記	1.6	14	0.4	6.5	0.7	1.3	
4	歴史物語・時代物語	0.5	3.7	2.3	5.5	2.3	3.2	
5	歴史	0.8	1	0.8	1.8	0.3	0.4	
6	地理・旅行	0.2	1.3	0.2	1.7	0	0.7	
7	社会科学	1.8	2	3.3	0.5	2.6	0.2	
8	科学物語	0.7	1.7	1.1	2.9	0.3	0.4	
9	自然科学	5.7	5	1.1	1.4	1.1	0.3	
10	産業・工業	0.8	—	0.5	—	0.5	—	
11	スポーツ	1.2	0.8	1.7	0.7	1.3	0.1	
12	芸術	1.2	0.3	0.8	0.6	0.4	0.2	
13	言語	0.8	1.3	0.5	1.1	0.7	0.7	
14	児童文学	昔話	0.6	13.3	0.1	0.8	0	0.1
15		寓話	0.1	4	0	0.2	0.3	0
16		伝説	0	0.6	0	0.3	0.1	0
17		神話	0.1	0.7	0	0.7	0	0.1
18		童話	14.9	9.5	0.3	1.2	0.3	0.1
19		動物物語	0.5	6.9	0.1	2.5	0	1.4
20		ファンタジー・SF	3.2	5.4	3	1.6	1.7	0.6
21		英雄物語	0	0.1	0	0.6	0	0
22		冒険(探検)物語	1	9.6	0.7	11.1	0.5	1.7
23		探偵物語	3.8	3.9	0.7	8.6	0	2.9
24		親子(家族)物語	0.3	4.3	0.2	3.2	0.1	0.9
25		友情物語	0.3	6.4	0.6	7.1	0.1	1.6
26		怪談(怪奇物語)	5	—	0.7	—	0	—
27		上記以外の児童文学	17.2	0.7	4.2	5.6	1	4.5
28	ヤングアダルト・一般	エッセイ(随筆)	0.4	0	1.1	0.3	0.6	1.3
29		純文学	0.5	1.5	3.1	25	2.7	62.1
30		大衆文学	13.1	0.1	50.8	1.3	57.3	9.9
31		ライトノベル(軽文学)	3	—	16.7	—	19	—
32		ケータイ小説	0.2	—	2.7	—	2.6	—
33		詩歌	0.5	0.4	0.1	0.9	0.4	1.1
34		戯曲・脚本	0	0.2	0.2	0.9	0.6	1.5
35		ルポルタージュ(記録文学)	0	0.1	0.6	1.3	0.6	0.8
36	絵本	18.3	—	0.3	—	0.1	—	
37	その他	1	1.3	0.5	0.8	0.7	1	

表中の1958年調査データは、阪本・西尾(1959)及び阪本・野口(1959)による。

中学生では、大衆文学に興味を持つ生徒が 50.8%と最も高く、次いで、ライトノベル 16.7%、児童文学（表 1 の 14～26 以外のジャンル）4.2%、社会科学 3.3%、純文学 3.1%、児童文学のファンタジー・SF 3.0%などとなっている。大衆文学では、ミステリー作品への人気が高い。1958 年の調査では、純文学が 25%と最も高く、また、児童文学の系統への興味も維持されていたが、今回の調査からはこの傾向は弱まっていることが窺われる。1958 年の調査の時点では、ライトノベルというジャンルは存在していなかった。そもそも、ヤングアダルト層（中・高校生）にターゲットを絞った文学作品が数多く登場するようになるのは 1970 年代半ばであり（玉川博章は、1973 年の秋元書房による秋元文庫が始まりとしている）、その後のアニメーションブームなどを経て、1990 年代半ばから末にかけて、電撃文庫（アスキー・メディアワークス）、富士見ファンタジア文庫（富士見書房）などに代表されるライトノベル（軽文学）というジャンルが登場する（玉川、2004）。ただし、ライトノベルは、その定義がまだ明確ではなく、出版社サイドがライトノベルを標榜していない場合には、タイトルからだけでは判断が難しい場合も少なくない。内容面では、アニメーション基調のイラストレーションを多用していることなどが共通の特徴として見られる（本研究では、主にこれらに合致するものをライトノベルとして分類）。また、近年は、大衆文学においてもヤングアダルト層に照準を当てた作品が増え、かつ、ライトノベルと大衆文学との境界もあいまいになりつつある。こうした動向が、中学生の本への興味にも大きな影響を与えているであろうことは想像に難くない。

高校生では、大衆文学に興味を持つ生徒が 57.3%と最も高く、次いでライトノベル 19.0%、純文学 2.7%、社会科学とケータイ小説ともに 2.6%などとなっている。大衆文学とライトノベルが上位を占めているのは中学生と共通であるが、その割合は中学生よりもさらに高まっている。ケータイ小説も、2000 年代以降に登場したジャンルのひとつで、携帯電話サイトに投稿された短文の小説を書籍化したものである。1958 年の調査では、純文学 62.1%、大衆文学 9.9%が上位を占めていたが、今回の調査では、純文学はわずか 2.7%に過ぎず、大衆文学とライトノベルに興味の中心が移行していることが窺われる。

もう少し詳しく学年別、男女別に傾向を整理すると、表 3～表 6 となる。

表 3 小学生（1～3年生）が興味を持っている本のジャンル（上位 10 位まで）

	(単位は%)															
	1年生			2年生			3年生			1958年調査			1958年調査			
	ジャンル	全体	男子	女子	ジャンル	全体	男子	女子	ジャンル	全体	男子	女子	ジャンル	全体	男子	女子
1	絵本	61.5	59.4	63.4	絵本	42.1	40.4	43.8	童話	25.6	21.6	29.1	童話	19.4	16.6	21.8
2	童話	14.8	11.8	17.7	童話	23.4	22.4	26.1	伝記	11.3	13.2	9.7	絵本	18.2	17.9	18.5
3	自然科学	9.3	14.3	5.2	自然科学	9.3	12.2	6.7	童話	11.1	9	14.2	児童文学(表1の14～26以外)	17.4	9.3	24.2
4	伝記(怪奇物語)	2.7	3.8	1.5	児童文学(表1の14～26以外)	4.8	3.8	5.7	動物物語	10.6	10.5	10.7	自然科学	6.8	10.5	3.2
5	その他	2.7	2.8	2.9	伝記(怪奇物語)	4.3	4.9	3.6	傳記	8.5	8.2	8.7	伝記(怪奇物語)	6.3	6.4	6.2
6	児童文学(表1の14～26以外)	1.8	0.3	3.2	探偵物語	1.5	2.3	0.8	ファンタジー-SF	5.2	7.4	3	探偵物語	5.6	6.5	4.8
7	童話	1.4	1.7	1.2	その他	1.4	2	0.8	冒険(探検)物語	5	7.9	2.4	大衆文学	5.6	6.8	4.7
8	ファンタジー-SF	1.4	0.7	2	ファンタジー-SF	1.3	1	1.6	友情物語	4.9	4.2	5.3	ファンタジー-SF	3.5	2.6	4.2
9	童話(こぼれ)	1.1	1.3	0.9	社会科学	1.2	1.2	1	自然科学	4.1	5.3	3	伝記	2.2	2.8	1.7
10	産業・工業	0.9	2	0	童話	0.9	1	0.9	親子物語	4.1	2.8	5.1	芸術	1.7	1.8	1.6

表中の1958年調査データは、阪本・西尾(1959)による。

* 小学校1年生については、阪本・西尾(1959)では調査を行っていないため、表には示していない。

表 4 小学生(4~6年生)が興味を持っている本のジャンル(上位10位まで)

ジャンル	4年生						5年生						6年生					
	2011年調査		1958年調査		ジャンル		2011年調査		1958年調査		ジャンル		2011年調査		1958年調査		ジャンル	
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
1 児童文学(表1の14~28以外)	21	14.2	19.5	21	12.9	13.2	24.9	10.3	31.0	17.4	12.1	17.7	22.8	15.9	23.5	22.9	13.9	28.5
2 児童文学(表1の14~28以外)	17.2	14.2	19.5	13	12.9	13.2	18.8	20.9	17	10	6.8	13.2	10	6.8	13.2	10	6.8	13.2
3 児童文学(表1の14~28以外)	10.9	12	10	10.4	14.1	6.4	9	5.7	12	8	6.4	12.2	7.8	7.3	8.1	4.6	10.4	13.7
4 絵本	9.9	8.4	10.4	9.3	7.3	11.2	6.2	7	5.5	9.3	13.4	5.2	4.1	4.3	4.3	8.4	9.3	7.1
5 探偵(怪獣物)	6.7	6.9	6.4	6.6	8.4	8.0	5.1	3.9	6.1	7.4	3.2	11.5	3.8	3.7	3.9	2.8	7	4.8
6 自然科学	5.9	9.2	2.7	6.3	8.1	4	4.8	2.4	4.2	4.9	7.5	2.4	2.3	4.2	2.7	2.3	4.2	2.7
7 探偵物	5.6	7	4.8	4.8	7.7	4.7	4.9	5.5	4.5	4.9	5.2	4.6	2.8	4	2	4.8	5.6	4.4
8 ファンタジー-SF	3.5	3.5	3.2	5.5	2.8	8.5	4.2	3.8	4.5	4.2	1.8	6.7	2.4	3.5	1.4	3.1	4.1	2.8
9 伝記	2.6	2.7	2.5	2.6	2.5	5.7	4.1	6.9	1.7	4.1	6.1	2.1	2.2	4.8	0.3	3.9	3.9	3.8
10 ライトノベル	2.4	2	2.9	3.2	3.6	2.9	2.6	2.9	2	3.9	3.8	4	2.2	2.1	2.3	2.4	2.3	2.2

表中の1958年調査データは、阪本・西尾(1959)による。

表 5 中学生が興味を持っている本のジャンル(上位10位まで)

ジャンル	1年生						2年生						3年生					
	2011年調査		1958年調査		ジャンル		2011年調査		1958年調査		ジャンル		2011年調査		1958年調査		ジャンル	
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
1 児童文学(表1の14~28以外)	48.6	45.2	51.2	16.1	21.3	11.1	51.1	45.9	55.0	22.4	15	28.2	53.3	47.4	56.5	39.9	37.1	46.3
2 ライトノベル	14.4	15.8	13.4	12.6	8.7	16.3	17.3	17.7	17	10.7	15.4	7.1	16.8	21.1	16.5	7.6	11.8	4.8
3 児童文学(表1の14~28以外)	7.4	4.2	9.8	10	12.6	7.8	4.3	0.1	8	9.1	10.2	8.1	4	5.4	2.7	6.4	9.4	4
4 ファンタジー-SF	4.7	4.7	4.8	9.3	3	14.9	5.4	2.8	2.8	8.3	9.7	7.2	3.8	4.7	2.7	5.8	5.1	5.9
5 探偵物	3.9	4	3.9	5.1	10	5.1	2.9	4.3	1.2	7.8	9.5	6.4	2.3	4.4	2.4	5.6	1.8	6.7
6 社会科学	2.4	1.5	3.1	4.4	1.6	7.1	2.6	3.3	2.1	6.8	6	7.7	2.2	2.2	2.2	2.2	4.1	5.8
7 探偵物	1.9	3.7	0.6	4.2	2	6.1	2.3	1.6	3	6.8	2.7	10	1.7	1.1	3.1	3.8	4.6	3.1
8 児童文学(表1の14~28以外)	1.8	2.5	1.3	3.8	4.8	3.3	2.2	2.2	3	4.1	1.9	2.3	2.2	2.2	2.2	2.2	5.7	0.5
9 伝記(怪獣物)	1.6	2	1.4	3.2	5.1	1.4	2.7	0.6	1.6	2.7	4.1	1.6	1.7	1.3	2.3	2.7	0.9	4.1
10 ケータイ小説	1.4	0.1	2.5	3.1	2	3.9	1.3	2.4	0.4	2.3	0.9	3.9	1.2	2.0	0.4	2.4	2.7	2.9

表中の1958年調査データは、阪本・野口(1959)による。

表 6 高校生が興味を持っている本のジャンル(上位10位まで)

ジャンル	1年生						2年生						3年生					
	2011年調査		1958年調査		ジャンル		2011年調査		1958年調査		ジャンル		2011年調査		1958年調査		ジャンル	
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
1 児童文学(表1の14~28以外)	50.9	40.3	57.1	56.5	55.4	58.1	61.8	55.7	64.0	65	62.7	69.6	56.4	48.8	62.9	64.8	61.9	67.9
2 ライトノベル	25.6	31.8	21.9	7.8	6.7	9.7	16.4	24.4	12.3	11	17.3	10.3	15.2	26.0	10	10.8	12.6	8.3
3 ケータイ小説	8.4	0	8.8	4.1	5.2	2.1	3.4	4.5	2	4	3	3	3.4	2.8	3.7	3.2	3.6	2.3
4 児童文学(表1の14~28以外)	2.3	3.9	1.9	4.1	3.2	2.1	2.7	4.3	1.9	2.9	3.1	1.6	2.9	2.9	3	2.5	2.2	2.2
5 探偵物・時代物	2.1	5.2	0.6	3.9	5.9	0.6	2.2	0	3.3	2.4	3.4	0.7	2.4	1.4	2.7	2.1	1.6	2.8
6 社会科学	1.9	3.9	0.6	2.9	1.9	4.6	2	1	2.6	1.6	1.6	1.8	2	2.6	1.7	1.6	2.8	0.8
7 スポーツ	1	1.9	0.6	2.1	3.4	1.6	1.7	3.5	0	1.5	1.7	0.6	1.8	3	1.7	1.6	1.2	2.1
8 探偵	1	2.6	0.3	2.5	3.2	1.4	1.5	0.5	2.1	1.3	1.7	0.6	1.8	0	1.4	1.7	1.1	1.1
9 ファンタジー-SF	1	0	1.9	1.8	1.4	2.4	1	1	1.2	0.5	2.7	1.4	0.7	1.7	1.8	1.6	1.6	1
10 詩歌	0.8	0.8	0.9	1.4	1.6	0.8	1.1	0.5	1.3	1.2	0.8	1.8	1.4	0	2	1.1	0	2.4

表中の1958年調査データは、阪本・野口(1959)による。

学年別に見てみると、小学校低学年では、絵本、童話、自然科学が興味の上位3位以内に位置し、小学校中学年になると、引き続き童話が上位3位以内に位置するが、絵本は順位を下げていく。また、4年生の段階で大衆文学が3位に登場するようになる。小学校高学年になると、童話も順位を下げ、大衆文学とともに、ライトノベルが上位3位以内に位置するようになる。1958年の調査と比較すると、小学校低学年では、上位3位以内に童話が位置することは共通であるが、2年生で1位であった昔話は今回の調査では10位と興味を大幅に下げている。また、2位であった伝記は今回の調査では上位10位以内には含まれていない。なお、絵本が1958年の調査で上位に入っていないのは、絵本を分析対象としていないためである。小学校中学年でも、上位3位以内に童話が位置することが共通している。小学校高学年では、5年生までは上位3位以内に童話が低学年から共通して位置しているが、6年生になると、上位3位以内に共通して見られるジャンルはなくなる。

中学生になると、上位の1位と2位は1年~3年まで一貫して大衆文学とライトノベルが占めるようになる。この傾向は高校1年~3年生でも同様である。中学2年生と高校1年生では3位にケータイ小説が、中学3年生と高校2年生では3位に純文学が位置している。また、このほか、社会科学、歴史物・時代物が見られることも、中学1年生~高校3年生までに共通する傾向といえる。1958年の調査と比較すると、上位3位以内で共通するのは、中学3年生と高校2年生で純文学が含ま

まれるだけである。純文学は、1958年の調査で中学2年生から高校3年生まで1位を占めていたが、いまや、その位置は大衆文学とライトノベルに取って代わられている。

神崎友子は、勤務校の中学生の読書興味を分析して、「中学校期は児童書から大人向けの本への移行期であり、特に2年から3年にかけて顕著な推移が見られる」としている（神崎，2010）。今回の調査結果は、この移行は、小学校中学年からすでに見られ、中学生1年から2年にかけて顕著であることを示している。

さらに、上位3位以内の傾向について男女別に見てみると、小学校低学年では、絵本は男女とも大きな差は見られないが、童話は女子のほうが、自然科学は男子のほうが興味が高くなっている。小学校中学年で登場する大衆文学は、4年生・5年生の段階では男子のほうが女子よりも若干興味が高いが、6年生以降高校生にかけては男子と女子の興味の高さが逆転し、その差は徐々に広がっていく。逆に、ライトノベルは、小学生の段階では女子のほうが男子よりも若干興味が高いが、中学生以降高校生にかけては逆転し、男子のほうが高くなっている。中学生、高校生段階で上位3位以内に見られるケータイ小説は、女子の興味が圧倒的に高い。また、純文学は、男子のほうが高くなっている。

3.児童生徒が一日に本を読む時間

一日の読書時間を質問した（分単位で記入して回答。平均値，%は有効回答児童生徒数に対して算出。有効回答児童生徒数は小学生2534人，中学生2874人，高校生1390人）。

小学生，中学生，高校生に大別したときの一日の読書時間は、図3の通りである。小学生では「26～30分」（25.1%），中学生も「26～30分」（20.6%），高校生では「0分」（63.1%）との回答が最も多かった。小学生の97.4%，中学生の80.3%，高校生の89%が読書時間30分以内との回答であり，31分以上読書している児童生徒は2割に満たなかった。ただし，中学生や高校生のなかには3～4時間読書しているとの回答も見られた。

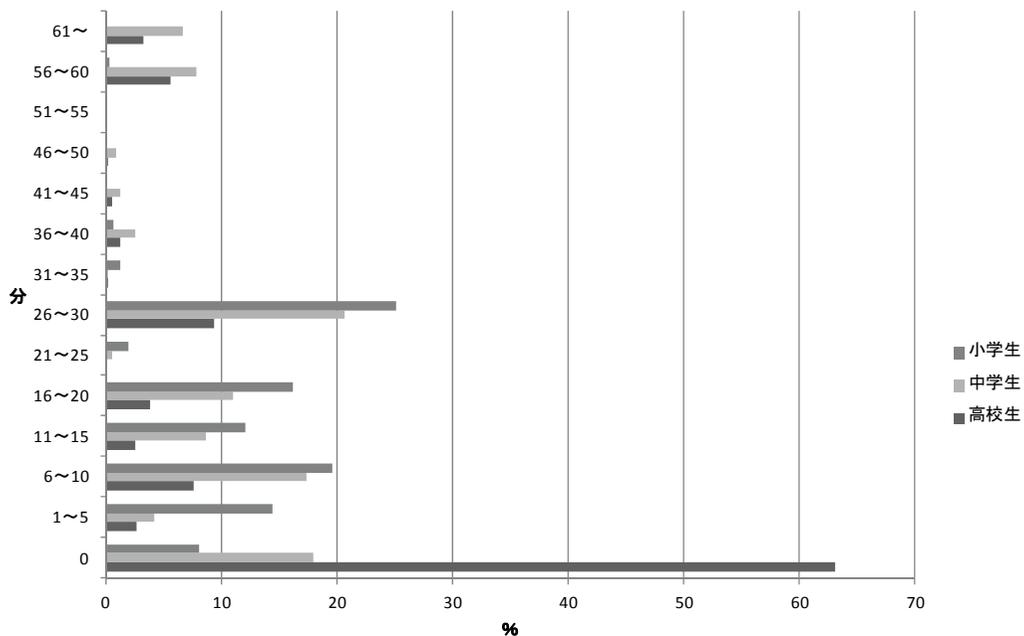


図3 児童生徒の一日の読書時間

一日当たりの平均読書時間は、小学生 16.6 分（男子 15.1 分，女子 18.3 分），中学生 26.5 分（男子 24.9 分，女子 28.2 分），高校生 13.3 分（男子 14.5 分，女子 12.6 分）であった。中学生が小学生や高校生よりも 10 分ほど長く読書しているという結果であった。男女別では、小学生と中学生は女子のほうが男子よりも 3 分ほど長い、高校生では逆に男子のほうが長くなっている。図4には、もう少し詳しく、平均読書時間を学年別にまとめた。平均読書時間は、中学1年生の 29.7 分が最も長く、逆に高校3年生の 11.1 分が最も短くなっている。

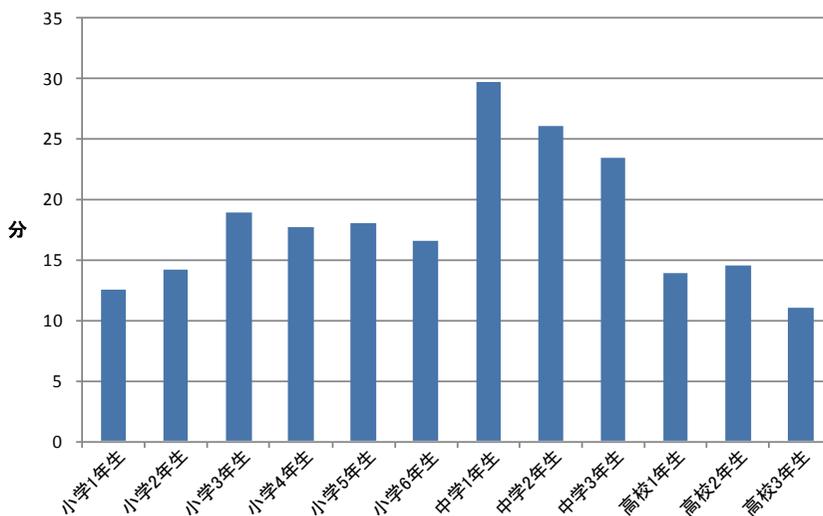


図4 一日当たりの平均読書時間（学年別）

4.児童生徒が一ヶ月に読む本の冊数

一ヶ月の読書冊数を質問した（2011年5月における冊数を記入して回答。平均値，％は有効回答児童生徒数に対して算出。有効回答児童生徒数は小学生3426人，中学生3017人，高校生1408人）。

小学生，中学生，高校生に大別したときの一ヶ月の読書冊数は，図5の通りである。小学生では「1～5冊」（36.0％），中学生も「1～5冊」（67.2％），高校生では「0冊」（54.0％）との回答が最も多かった。高校生以外の「0冊」の割合は，小学生で4.3％，中学生で14.1％であった。全国学校図書館協議会と毎日新聞社が共同で実施した第56回学校読書調査（2010年度）の調査結果では，「0冊」の割合が小学生6.2％，中学生12.7％，高校生44.3％であり（全国SLA研究調査部，2010），この結果と今回の結果を比較すると，小学生，中学生は近似しているものの，高校生では，今回，約10％高い割合を示している。

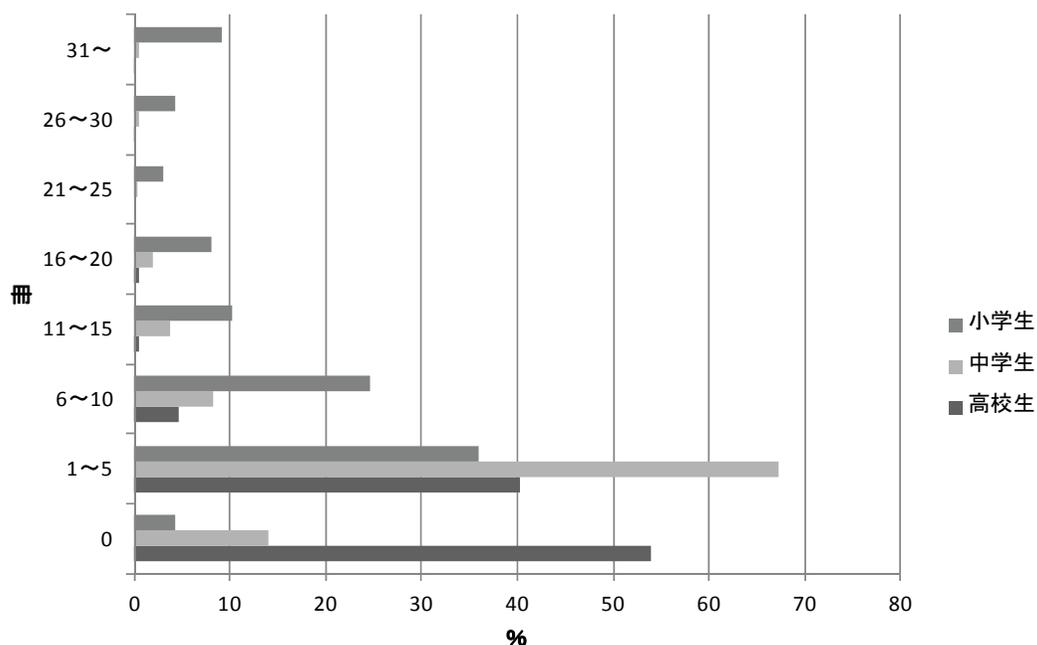


図5 児童生徒の一ヶ月の読書冊数

一ヶ月当たりの平均読書冊数は、小学生 13.5 冊（男子 13.0 冊，女子 14.0 冊），中学生 4.1 冊（男子 3.9 冊，女子 4.4 冊），高校生 1.5 冊（男子 1.7 冊，女子 1.4 冊）であった。前述の第 56 回学校読書調査では、小学生 10.0 冊，中学生 4.2 冊，高校生 1.9 冊であり，今回の結果とほぼ近似する結果となっている。男女別では，小学生と中学生は女子のほうが男子よりも若干多いが，高校生では男女が逆転している（第 56 回学校読書調査でも同様の傾向）。図 6 には，もう少し詳しく，平均読書冊数を学年別にまとめた。平均読書冊数は，小学 2 年生の 21.0 冊が最も多く，逆に高校 3 年生の 1.1 冊が最も少なくなっている。

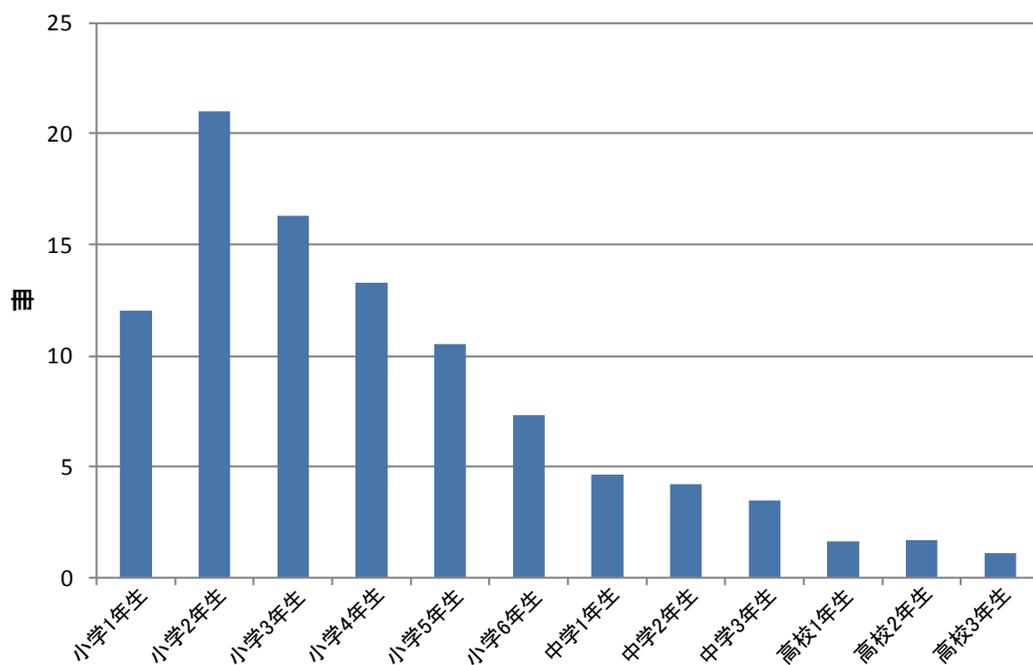


図 6 一ヶ月当たりの平均読書冊数（学年別）

考 察

1. 児童生徒のメディア興味と読書生活

以上の結果を整理すると、次のようになるだろう。

メディアへの興味については、小学生から高校生に至るまで、テレビへの興味が最も高いことが分かった。本については、小学生ではテレビに次いで2番目に興味が高いが、その内実は小学3年生をピークに高学年に行くほど興味が徐々に低下しており、中学生では4番目となり、高校生に至っては興味の上位からは見られなくなる。一方で、中学生では本よりも興味が高いものにインターネットとマンガ、高校生ではこれらに加えてケータイ、映画などが登場する。また、本への興味については、小学生では男子よりも女子のほうが20%以上高く、中学生でも男子より女子のほうが10%以上高かったが、高校生になると男女にほとんど差がなくなる。男子よりも女子のほうが興味の低下幅が大きいといえる。

本への興味の低下傾向と同様、一ヶ月当たりの平均読書冊数も、小学生13.5冊をピークに、中学生4.1冊、高校生1.5冊と大幅な減少傾向を示している。しかしながら、一日当たりの平均読書時間については、中学生が26.5分とピークであり、小学生16.6分、高校生13.3分よりも10分ほど長く読書している。標準偏差(SD)を見ると、小学生11.069であるのに対して、中学生31.574、高校生27.512であり、中学生、高校生ではばらつきの大きいことが分かる。その実態として、図3からも分かるように、読書時間に二極化が見られる。とりわけ、中学生では、「0～30分」は80.3%（小学生では97.4%、高校生では89.0%）にとどまっているのに対して、「56～60分」及び「61分～」が14.4%もあることが、平均値を押し上げているものといえる。

2. 読書興味の発達段階モデル

本研究の目的は、阪本の示した読書興味の発達段階モデルを再検討し、現状に即した発達段階モデルを提示することにある。前述の調査結果に見る児童生徒を取り巻くメディアへの興味や読書生活の実態をふまえれば、阪本が示した読書興味の発達段階モデルへの修正が必要であることは間違いない。

筆者は、図7のような読書興味の発達段階モデルを提示したい。すなわち、a.絵本期（～8歳）、b.童話期（6歳～10歳）、c.児童文学期（8歳～13歳）、d.大衆文学期（11歳～）、e.ライトノベル期（13歳～）である。なお、大衆文学とライトノベルは、すでに述べたように、その境界はあいまいになりつつあり、両者をあわせて「文学期」と呼ぶことも可能であろう。なお、このモデルは、先行研究同様、児童生徒の興味が上位にある本のジャンルをもとにしたものであり、これ以外のジャンルに興味があったくないということを意味するものではない。

この筆者のモデルを先行研究と比較すると、阪本のモデル（1949；1950）とは共通する部分は一部で見られるものの、全体として大きく異なるものとなった。一方で、樋口のモデル（1991）とは類似するものとなった。もう少し具体的に見ると、阪本のモデルにおいて示された童話期（8～10歳）は6歳からに始まりが早まっており、文学期（14歳～）も小学校高学年の11歳からと早まっている。ただし、文学の中心は、阪本のモデルでは純文学であるのに対して、筆者のモデルでは大衆文学とラ

イトノベルである。一方で、昔話期、寓話期、物語期、伝記期、思索期といった段階は見られなくなっている。阪本のモデルと比べると、筆者の示した読書興味の発達段階モデルは著しく平板化したものとなっていることが分かる。また、樋口のモデルとは、伝記期が見られなくなっている以外、類似する部分が多い。

読書への動機づけを高めるためには、読書興味をふまえた指導が有効である。この点、阪本のモデルは、年齢ごとにどのようなジャンルの本に興味を持つかが細分化して提示されており、指導に活かしやすいモデルであったといえる。だからこそ、長年にわたって用いられ続けてきたともいえる。ところが、実際には、筆者が示したモデルにあるように読書興味の発達段階は平板化してきており、その分、指導の困難さは年々増しているはずである。なかでも、今日、昔話や寓話、伝記などへの興味はかなり低くなっている。私たち大人は、例えば、伝記であれば、“成功したり努力した人の生き方を学んでほしい”などの理由で、児童生徒に読んで欲しいと思い、読むように働きかける。しかし、伝記への興味自体が低くなっている現在にあって、働きかけ方を相当に工夫しないと、伝記どころか読書そのものを拒絶しかねない。そもそも、本への興味自体が学年進行とともに低くなっていくのだから、尚更である。

では、これからの読書指導はどうあるべきなのだろうか。この点は、今後の検討課題である。また、今回の調査では、児童生徒の読書興味と読書能力との相関関係については調査を行っていない。この点も、今後、引き続き研究を進めたい。

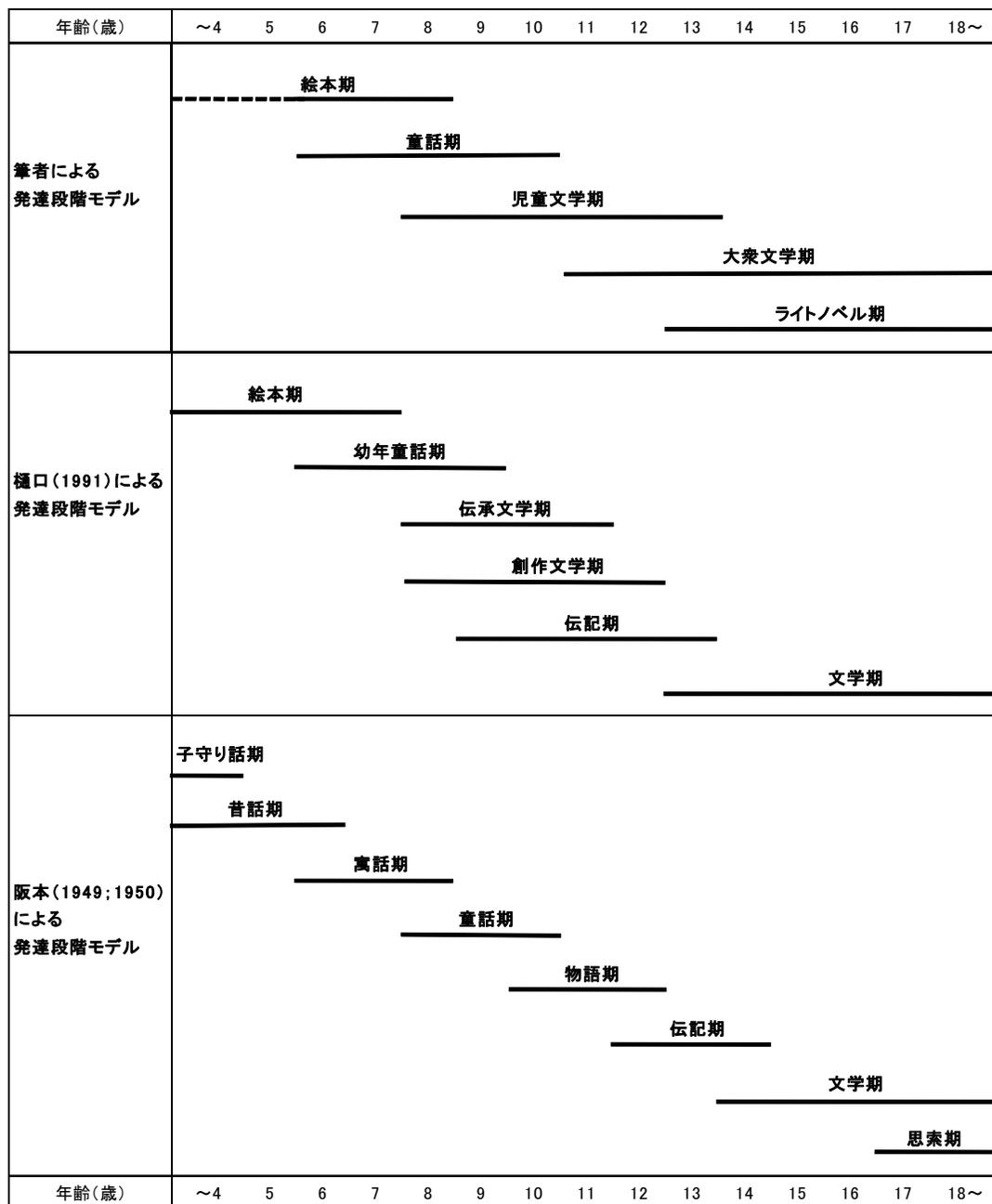


図7 読書興味の発達段階モデル

引用文献

- 朝比奈大作編 (2002). 読書と豊かな人間性. 樹村房.
- Chall, Jeanne S. (1983). *Stages of Reading Development*. McGraw-Hill.
- 深川恒喜ほか編 (1966). 学校図書館事典. 第一法規.
- Gates, A. I. (1947). *The Improvement of Reading: A Program of Diagnostic and Remedial Methods*. Macmillan Company.
- 樋口洋子 (1991). 成長期における児童の読書興味の変化とモデル化, 図書館学会年報, **37**(4), 166-178.
- 神崎友子 (2010). 現代の中学生の読書興味と発達の検討: 「本の紹介」における選書から. 京都教育大学教育実践研究紀要, **10**, 1-11.
- 阪本一郎 (1949). 興味とその発達. (児童研究会編. 児童の行動と発達 (下). 金子書房, 89-112.)
- 阪本一郎 (1950). 読書指導: 原理と方法. 牧書店.
- 阪本一郎 (1957). 発達と読みもの. (東京学芸大学教育心理学研究室編. 子どもの読書と文化 (教師のための児童心理学講座第 5 巻). 岩崎書店, 38-56.)
- 阪本一郎・西尾宗人 (1959). 小学校児童における読書興味の発達についての一調査. 読書科学, **3**(3), 13-21.
- 阪本一郎・野口隆 (1959). 中・高等学校生徒における読書興味の発達についての一調査. 読書科学, **3**(4), 29-32.
- 阪本一郎ほか編 (1967). 現代読書指導事典. 第一法規.
- 阪本一郎 (1976). 読書興味の発達. (阪本一郎編著. 現代の読書心理学. 金子書房, 117-144.)
- 阪本一郎 (1979). 読書興味の発達と指導. 読書科学, **23**(2・3), 44-50.
- 阪本敬彦 (1982). 読書科学研究の 25 年 (Ⅲ): 1 号から 50 号までの心理学的研究を中心に. 読書科学, **26**(2), 85-90.
- 玉川博章 (2004). 現代における青少年向け書籍の発展—ヤングアダルト文庫出版史. 出版研究, **35**, 41-64.
- 塚田泰彦 (2010). 読書科学研究の近年の動向と課題. 専門図書館, **242**, 9-13.
- 全国 SLA 研究調査部 (2010). 第 56 回学校読書調査報告. 学校図書館, **721**, 16-42.

謝 辞

ご多忙のなか、調査にご協力いただきました小学校、中学校、高等学校の先生方及び児童生徒の皆さまに心よりお礼申し上げます。また、調査内容の検討及び調査結果の分析に際しまして、貴重なご助言をくださいました東京学芸大学附属小金井小学校司書中山美由紀氏、大妻女子大学講師野口久美子氏に深く感謝申し上げます。